

戯曲 國境の移民

香村

人物

前田敏夫 若き夫婦の移民
前田秋子
田村愛子 移民の妻(秋子と同年輩)
郵便夫 一人
國境監視人 米國 墨國 人二人
土人 三四人

場所

太平洋近くの 米墨國境線に鉛ふ 墨國領に建てられたる茅屋
舞臺の後方丘山(背景に)兩國 國境監視人が銃を肩に往来して居る 前面の左方に カクテス サボテン等 南國性植物繁る 前方に道路を通し 右方に 茅屋あり 茅屋の入口は壁に面し前は 開けっ放しとす

時 夏の日没れ時 第一場

秋子 割烹着を着て 髪を束めて 粗末な風にて 入口に立って 外を眺めて居る

秋子 (戸口からゆったり出て来て カクテスの方に歩み寄りながら 力抜けがしたやうに呟く)
まー どうしたんでしやう 未だ歸って見へない 遅く迄 此んなに見へ無くなる迄働けるもんぢや無い(しばらくして) あー いやになってしまふわ 口も 日本のお母さんなんか 私が此んな苦勞して居やうなんて夢にも思つて居やしないわ(國境線の人を振り向いて)
まー いやになつちまふ 毎日毎日口を肩いでるのを見ると 氣が變になつてしまふわ 私はきっと氣が狂ふわ あー 早く何處かへ行つてしまひたい(顔を仰向けて ぐるぐる歩く 馬の蹄めの足音が聞へる)(秋子が振り向く 待ちくたびれた聲で懷かしそうに)

秋子 遅かったのね

郵便夫(姿を舞臺に表わしながら) えー えー 今日は すっかり足をいためましたもので

秋子(心から) 本当にお氣の毒だわーね

郵便夫(黙つて近づいて鞆から手紙を出して渡す)

秋子 有難う

(郵便夫 去る 秋子見送りながら)

秋子 ま一何だって 私一 ほ一 あきれてしまふ (笑ひ笑ひ 手紙を見入る 嬉しさうに)
 ほう 日本からの手紙 おや お父さんからの 本当に珍らしい あら親展だなんて (外に眼
 を投げて) 早く歸って来れば良いのに (不幸に変わる) 此んなに待ってるのに どうしたと言
 ふんだろう (家の中に入って黙煙する パツと室中 明るくなる) (何か小聲に歌ひながら
 食卓に 夕食を運ぶ)

暫くして 扉を開けて外を見る 墨土人が三四人がやがや来る 秋子を見付けて 一様に帽子を脱いで叮嚀に挨拶する

一同 今晚は 奥さん
 秋子 今晚は 皆さん
 一同 有難うございます
 秋子 今日は 大変暑かったですね
 一同 はい 有難うございます (口ききぎる)

秋子 室外を一見し 家に入って次の室にかくれる やがて 敏夫 馬に乗って入り来る 戸口の前に馬を進め

敏夫 おいー おい おれだ (小聲) 居ないのか口 おい 秋子ー

馬の背にくくり付けた品物を取りはずしながら 馬から下りる 扉を外から押し口口口が外に流れる

敏夫 今歸った 買物をしてるから 早く取って呉れ
 (馬の背から戸口におろす 秋子奥の室から飛んで出て来る) (入口の口込みを見下しながら)
 秋子 多さん買って来たのね
 敏夫 うん (入口で顔を押し付けて接吻する)
 秋子 遅かった と思って居たら 町に廻はったの 農園の方どうなの い一の
 敏夫 うー 農園を見廻はって 暮方から行ったものだから こんなに遅くなった
 秋子 私 それなら良かったけど 又どうかしはせなかったかと思って
 敏夫 すまなかった

敏夫 馬を引いて家の後に去る 秋子品物を次の室に運ぶ 暫くして 敏夫 入口から家の中に入る

やがて食卓を囲む

秋子 貴方 日本のお父さんから手紙が来しましたのよ
敏夫 そうか 何と書いてある
秋子 未だ封を切らないのよ 貴方宛に親書と書いてあるのよ (手紙を胸から出し)

敏夫に渡す 敏夫 開封する

秋子 何と書いてありますの 顔を持って覗くやうにする
敏夫 眼を通してながら (段段 表情を曇らす)

□□が續くと 敏夫読み終わって 手紙を仕舞ほうとする

秋子 何と書いて来ましたの
敏夫 うー 何でも無い (氣分が落ち付かぬー)
秋子 でも 何か書いてあるでしやう 親展書ですもの
敏夫 ーうー では言ふが驚いちやいかんよ
秋子 (下氣にして) 悪い事なの
敏夫 (妻の顔を見て) だまって
秋子 見せてー (手をのばして手紙を取ろうとする 敏夫 素早く手紙をたたむ)
あらー (敏夫見て) 見てはいけないの
敏夫 うー いかん
秋子 (うろたへて泣きそうになる) なぜいけませんの 貴方に來た手紙を 而もお父さんから來た手紙を妻の私がなぜ見てはいけないの
敏夫 (沈黙して居る)
秋子 ね 見せて下さい 貴方 ね (手を差し出す)

敏夫 其の手を取って接□する

秋子 貴方ーって言ったら ね お願いだわ では 聞かせて丁戴
敏夫 聞かせるよ 聞かせるが 驚いてはいかんよ
秋子 そりや分りませんよ (不安になる) 日本に何か起こったの 火事でもあったの

敏夫 それじゃ話すが お前のお母さんが 病氣だそうだ
 秋子 病氣（驚いて）何の病氣だろう（考へるやうにして）ねー 貴方往生ですわ 本当の事を言って丁戴
 敏夫（あっ□□□）それが本当さ（敏夫は妻の溜息を□□□ 眼をつぶって仰向く）
 秋子 本当ー（談話のやうに）そう お母さん 私達の事をきっと心配して居らしゃるわ 此んなメキシコなんかに来たものだから 泣いて居らっしゃるわ
 敏夫 おい おい よせ よせ そんな心配事は お前は も□ 元氣になって呉れんと困まるよ そうそう ホームシックぢや 俺の開墾事業も張り合いが無いじゃ無いか 日本を出る時のお前になって呉れ
 秋子 それや六ヶ敷事ですわ
 敏夫 どうしてだ
 秋子 どうしても どうしても 少しはくら□んでも こんな田舎かの 五哩行っても 十哩行けども 話しの出来るやうな日本人は居やしないぢや無いの 友達一人無くて 寂しくて寂しくて（秋子泣き始める）貴方が朝仕事に出たら □□□□の茅屋に 私一人 話し相手一人あるぢや無いし それに向ふの國境には□□もかしも 銃守が鐵砲かついで歩いて居ますは 私は思っただけでも 氣が狂ひそう□ですわ
 敏夫 今更そんな事を言っただけで仕様が無いぢや無いかぬ お前だって承知の前で移住したんぢや無いか
 秋子 そんな事は言ってや居ませんわ
 敏子 ちゃ どんな事だ
 秋子 私は 處には もう住みたか無いの
 敏夫 馬鹿言ふな 住みたかないなら 日本に歸れ 馬鹿な子供のすねるやうな事を言ってあきれてしまふわ
 秋子（泣きながら）獨りは 歸れませんわ
 敏夫 歸れない事があるか 歸りたかったら何時でも歸っていーよ 船賃は□□□□ー
 秋子 貴方は 私獨り 日本に歸れと仰有るの 顔を上げて どうして歸れます 結婚して一年 過ぎぬ裡 こんなお腹を抱へて 私 死んだ方が増しだわ
 敏夫 お前のヒステリーにも困ったものだ 朝は早くから 陽に焼かれて 夜は この通り泣かれて おい 助けて呉れよ 俺等は何も好き好のんでわざわざ墨國迄も働きに来たんぢや無いから お前だって其考へはあつたんぢや無いか 新天地を開く積りで やうやく住家を作ったばかりだもう 此の秋だってかなりの收穫があるんだよ
 秋子 私 そんな事はどうでも良いわ
 敏夫 訊談は休み休みにせい
 秋子 訊談ぢや無いわよ
 敏夫 ちゃ何だ
 秋子 私 此んな土地に住みたくないわ ね 何とかならない 私 日本人の居る土地が良いわ
 貴方だって そうでしやう 貴方の話し相手だって □な人は居ないぢや無いの ねー
 敏夫 それは お前が言ふ通りだが お前は女王のやうでいーじゃ無いか（おこる）

秋子 女王 ですって 此んなサボテンやカクテスの中の 何の女王なの 蛇かとかげの女王なら 私
お断りだわ

敏夫 (笑いながら) 蛇だって備ひ下や 無いか 膝にぴょんと来たら 南無あみ陀佛だよ

秋子 何と言やさ あの手でごまかすたり 貴方卑怯だわ

敏夫 何處に言ったって結局同じだよ 俺は此處を開拓したら 永住地 極楽だと信ぢるがね

秋子 いやだ こんな部ひな □□ぢぶらしの叢林が永住の地だなんて あきれるわ 金で □ 蕃人見たいな生活ぢや無いの 家の中だって何一つ無いぢや無いの もう半年以上になるのに 私達の周囲だって ちっとも開けそうに無いわ 此の砂漠に生活もなんもあつたものぢや無い (当惑をする)

敏夫 二年三年ぢやだめさ 少なくとも 五年十年の桁でなくちゃ

秋子 貴方 五年も 十年も 私が心棒出来ると思って

敏夫 今迄思つて居たんだが お前がいやだったら 先き言ふやうに 日本に歸つたらどう

秋子 貴方を残して どうして歸れます

敏夫 ちゃ 黙つて俺に従がえ

秋子 服従しますわ 服従するけど 家庭は楽しくしたいね

敏夫 当前だ 誰れだつていやな思ひはしたくない

秋子 ですから 何處かに行きませう そして 家庭らしい 家庭をね

敏夫 何處かつて 宛も無く 何處に行くんだ お前は日本の考へが未だ抜けきれんのだ ピヤノや家具が多さんあつて 話し相手を見つけ □ きたい人だからだめだ だから 都會育ちの令嬢は海外発展をぼう外するんだ イングランドから逃れた来た清教徒は一

秋子 (さへぎつて) もう多さん もう聞かなくても十分だわ

敏夫 ハハハ 秋子

秋子 ね 貴方 私の言ふ事を聞いて下さらない

敏夫 聞くよ 何でも聞くよ

秋子 (□□に) 何でもね ー 貴方 ベビーが生まれたらどうする考へ

敏夫 嬉しいぢや無いか 私等の結 □ だもの

秋子 嬉しいだけなの たつたそれだけ (秋子さびしくひにくる)

敏夫 (笑ふ) さー 嬉しい以上の何だね 幸福だよ お前の話し相手が出来て

秋子 ねー 貴方と言つたら それだもの ちっとも頼りにないやせぬわ

敏夫 お前はおれに頼っているのか

秋子 そりや 頼ってますわ

敏夫 だったら 大井に頼りになると言つたらどうだ

秋子 心細い 頼りだわ 貴方 此の國境の鐵條網の許で子供を育てやうと考へて居らっしゃるの そうぢや無いでしやう いくら貴方だって そりや
余り残酷だもの

敏夫 子供が生まれたら 又其時 其時で今からぐづぐづ心配せんでもい々よ おい それって生れた子供に歯がはへて歩み出すって言ふ解けでも無い
 だろう ねー

秋子 妾 本当に眞剣に言ふ人□□□んですが 貴方 此の墨國から新しい生活のもっと意義ある家庭を持たうとはお□ひになりませんの

敏夫 俺は此處が一番だと思ふんだがね 今に開けるし 日本人も後から後ら移住するようになったら確に面白く活かせると考へるがね 而し一体 お
 前の考へはどうだと言ふのだ

秋子 そう では 立腹しないで 聞いて下さいね 貴方 お隣の米國に行きたか無い

敏夫 國境を越へるのか

秋子 頷く

敏夫 一昨日も 四人越へて 三人は射殺されて縛ったのは 俺に働いて居た 山田ぢやなかったか あぶなくて やれるものか

秋子 でも 出来ない事は無いと思うふわ 余程運の悪い人が五人に一人位しかつかまっては居はやしない事よ

敏夫 そりや勿論 越へられりややね 金は取れるし 楽は出来るし あの鐵條網一つで極楽と地極だからなー

(沈黙□) □□□に□ける

秋子 運命だって そうだわ ね私達だって どんな面白い 愉快的 生活が出来ないとも 限らぬわ 何も此んな異郷に 土人相手に働かなくても
 結構 生活は出来ますは 此處友人がかへって日本より 苦しいは住みづらいは 何一つ楽しい事は無いんですもの 五年後は 果してどうなる
 か言ったもんぢや無いわ それに ベビーが生まれたら 妾だって 貴方だって 子供の為に犠牲になる覚悟をしなけりや無らないよ 今の□持
 だったら そんな順備する違いで まさかの折に 醫者も居ないですもの 隣り近所だって 五哩も 六哩も行かなきやならぬでしやう 妾 一
 日だって不安心だわ (秋子 暗然となる)

表てに馬の足音 続いて聲 ララリーラ ラーラリ

秋子 誰れか來たやうだわ (耳を傾むける)

女が歌ってる 馬が来る 敏夫 表戸を開ける

馬背にまたがった婦が現れる □□□□□□□□□□□□

女 むちを持った□ 右手を帽子の横に□□げてたわむれた敬禮をする

敏夫 やー 貴方ですか

秋子 だれー

敏夫 (チラッと□□つかって) 田村の愛子さん

秋子 まー 田村さん 久し振り表に出る

愛子 馬を下りる 敏夫 手綱を持って 馬を家の裏に連れて行く 秋子 愛子の手を取って 二人微笑しながら 家に入る

愛子 (椅子に腰を下ろしながら) 元気で—

秋子 え 有難う お陰で 相変わらず

愛子 相変わらず お陰で おたのしみのお邪魔— (笑ふ)

秋子 丁度良かったわ 今話して居たの 私此處いやになってしまったの で 外に逃げやうかと思って

愛子 逃げる (大げさに) 嘘でしやう

秋子 へー 本当ですわ

敏夫入り来る 愛子 椅子をゆづろうとする

敏夫 其儘に居て下さい 俺はこれで多さん (別の椅子に振ける)

愛子 (敏夫の方に向って) 貴方 何處に逃げるの 逃げるって本当

敏夫 ハー 逃げる 逃げはせんですよ 逃げる理由が無いですもの

愛子 (秋子を一べつして) かくしてもだめだわ (手で打つまねをする) でも 局面打□をやるんぢゃ無い

敏夫 其事ですか 今そんな馬鹿話をして居たんですよ

愛子 私参せいですわ 此んなの □何んかに生きて居たって 人間の数には入らぬ事 私達も七月四日のアメリカの独立の夜中には アメリカ人が
寝入って居る 皆な見計はらって 國境を越へて手筈にして居ますのよ 実はその話に来たのよ

秋子 貴方もなの まーだまって ひどいわ

秋子が□てたようなやさしい□みをする 愛子が□□□

愛子 の一のー 昨夜□めたのよ

敏夫 そうですか どう言ふ風に越すって

敏夫は秋子の口唇を見て 煙草を□□て出したやうに取り出してふかす

愛子 あのね それで あ 今日國境に□□て馬を乗ばして立ちん坊の監視役人さんに煙草をまいて 鐵□をおろさしてやったわ
皆な 来い ハンカチ出して瞳をこすって居たわ

秋子 笑ふ 敏夫も わらふ

秋子 おやおや 愛子さんった □も言はぬよ
 愛子 妾が馬の 手綱をゆるめて 立ちん坊さんの前に行くと 奴こさん□□をくづして故意を表すの
 敏夫 おやおや そりゃ ひどいな
 愛子 えー ひどいでしやう 馬の足で□□を蹴り上げて後から□□して行くと□も 喜ぶ無かったらありやしない 頭から水ぶちまけてやりたいやうな
 間の抜けた顔をして居るは それでも どじやうの子を食ってけたやうな支那人□をつけてるのよ 妾 氣が知れぬわ 顔を見て居ると□も
 出したくなるのよ で行き端に スマーキスをしてやると 叮嚀に帽子を脱ぐのよ いー加減な兵隊よ
 敏夫 愛子さんには驚いたね 流石は□□してみだ
 愛子 (ワザと□□な聲で) あら それはひにく
 敏夫 どう致しまして 秋子

秋子 次の間から□盆□を運ぶ

愛子 妾 あんな兵隊さんに鐵砲をあづけて居る政府の役人さんの氣が知れぬ チッとも□はか無い
 敏夫 いや 愛子さんには敵はんなー (あきれてしまふ) で どんな風に□す□です
 秋子 これでも お上から (愛子に□す) 何にもないけど
 愛子 何にも入らないわ 有難う 秋さん でね 妾これからね國境の兵隊を誘惑する事にしましたの
 秋子 へー どうしてです
 愛子 それが□□計かくなの
 敏夫 田村君 知って居ますか
 愛子 (微笑して頷く) 勿論ちゃ無いの 夫あつての私だもの
 敏夫 飛んだ侍婦人振だなー 煙い巻かれてしまったし
 愛子 それでね 妾 毎日 夕方國境線を 乗馬の練習のやうにして 駆けるの 夕方 六時以後の番人は朝の四時迄位 るす番らしいのよ でね
 (力を入れて) 七月四日前に それ等の兵隊に親しくしてね 一度教會にこっそり招待してやるわ そーして 様子を見てやろうと思ってね 夫
 も それが一番良い方法だと言って居りましたよ それから 具体的に迫めるつもなの 國境を超へて 半哩位歩いて 鐵道線路に出るそうです
 わ そーして 夜明けに藪の中に昼中眠って 又 次の夜 線路に沿って二哩位歩くと荷物自動者が □等を一杯積んで 其□□中は人が乗るやう
 にして居るんだそうな
 敏夫 □ですか 國境はどうして越します
 愛子 七月四日の夜はね 米國人の番兵さん獨立祭で飯けさわぐでしや
 敏夫 それが 宛になりますか
 愛子 えー 目□でって□一わ 其上にね 墨國領の番人は皆な□□に 招待しますですし

敏夫 来ますか知ら
 愛子 来ますとも 来るやうに 私が魅惑しますわ
 秋子 大膽だわね (感嘆したよやうに)
 愛子 外に方法が無いもの でなきや いつ迄経っても 此處で成功も幸福もありやしないものね
 元気を出して 〇れる
 敏夫 かんじんな話を先きにして下さい
 愛子 えー で妾 夜の十時頃から 妾の家に招待して それも 一哩位の目の 〇を十人ばかりと向側の番人さんも 〇〇〇〇のを三四人は 〇〇〇〇〇〇鉄錠
 から引っ張われ来ますよ
 敏子 うまく 〇切すまかなー 考へる
 愛子 貴方 男のくせに だめだわ それちゃ 秋子さん それちゃ 〇なくって
 秋子 私は余の大事を取り過ぎから 〇のりがしませんわ
 愛子 本当よー 虎穴に入らずんば虎子得ず事はできませんは
 敏夫 君子 あやふきは どうします
 愛子 松葉でも食って仙人の 〇似をしたらいいわ
 敏夫 兎に角 それちゃ命を的に冒険を試みますか 〇〇を期してね
 愛子 それから準備しなくちゃならないのよ 私達四人で
 敏夫 而し 女連れちゃ (敏夫は秋子を見る 愛子と視線を合さる)
 愛子 心配無用だわ
 秋子 私 貴方より大丈夫だわ
 愛子 (秋子を見て) 貴方も明日から手伝ひしてくれない 私と一緒に馬で駆け廻らない
 秋子 (〇〇〇〇〇〇〇〇) 未だ それ程の心配は入らないの でも 七月には どうだか分からないわ
 愛子 誰だつて 〇〇では無いの でも 又どうか出来るね (愛子 秋子を見て 〇〇〇〇) どうかなるやうにするのだわね
 秋子 いやだわ そんな事言つては
 愛子 私どうしても良いわ 私歸りますよ 又明朝来る事にして 貴方明日 私と行けて
 秋子 そー いつでも

愛子 立ち上る 続いて三人共立ち上る 敏夫は 〇きに 〇〇を開けて裏に廻って 馬を引き出してる
 暫く立って居て 愛子 馬上に乗る

愛子 又来ますよ
 敏夫 田村君に遊びにくるやうに 今度来る時は一緒にね

秋子 明朝入らっしゃいね 確にね 早くてもよいのよ

愛子 頷く 愛子 □を廻はして去る 二人は見送して 暫くして家の中に入る 前の椅子に肘をがら

敏夫 お前等は話合つて居たんだね

秋子 どうして

敏夫 ハハハ どうしても こす一ても お前が言い出すのが変だと思って居たら 直ぐ 田村の愛子さんだ 俺もどうも変に思ったが 遂理に巻き込まれてしまった

秋子 あらー 異ひますわ 私達 何にも話し合いなんかしなくてよ

敏夫 いまいましく 俺を計いやくに乘せやうと思って居たんだね

秋子 どうでもご勝手に 貴方 愛子さんになぜそう言わなかったの

敏夫 人の女房にそんな口が利けるか

秋子 だから 貴方卑怯ですわ

敏夫 青山何處にも在りで國を出た俺だ 卑怯も□もあるか だが米國がどれ程良いか□□だ 此処だつて不便は不便だが秋らは相当な収穫があるんだからね 二三年も住んで失敗なく□になら□に□□□始めての収穫期も来ぬのに□□□の調子ぢや 米國だつて思ひ程は無い事を□□せにやいかんよ 命を的にしただけの價值は無いかも分らんよ

秋子 それは□して見なくちゃ分りませんは 今からそんな二の足を踏んだつて 貴方 でも私は米國だったら少々苦しくても心棒出来相だわ

敏夫 今度だめだったら 日本に歸れ お前に付きまとわれた日にや 萬事此の通りだと思ふ □年や一年で 寂しさや苦しさにたへぬ様だったら 東京でカフェの女給でもした方が増した

秋子 私が女給でもなつたらと思ふの

敏夫 馬鹿言へ

秋子 だったら そんな事言わなくても良いわ

敏夫 そうした話迄さ が□へても 此の土地を賣らぬよ 失敗したら 又来れぬからね

秋子 妾 米國で失敗したら さっさと國にかえりますわ 貴方が来いと言つたつて付いて来はしませんよ

敏夫 よーし 今も言葉をわすれるな

秋子 貴方にはあきれて□事も出来ぬ 全てそれぢや貴方は失敗するのを願つて居るやうなものですわ

敏夫 お前が勝ちだ お前に俺が負けになるから 夕食をたくさんたべさして呉れ 飛んだ□□□に腹がすかすかだ お前等の様に 直ぐに恋に破れるとあま寺に行くとか瀧に飛び込むとか さわいだ女に限つて活動がぬきだの 此處は暑くて淋しいなんて言ふ人だから あきれてしまふ □□□教育は 仲々に□□な先生方が教授して□□るに異ひない 無□□□心中でもやる度胸になる□□□方が 此の自然から逃げ出すと言ふんだからたまらぬ いまいましい いつでもポケットに金が無いと不安不心だから仕末が悪い

秋子 貴方 腹が空いたら 黙ってお上り 私□□がしますよ

SEP 9, 1927

11

敏夫 あー 結婚と言う奴はえらいものだ 溜息を付くと同時に煙草の□を□に□□げる

一九二七年九月九日

午前十一時—午後四時

林田香村